

民家の建築様式は時代と共に変わり 「気仙大工」の遺構を残す伝承館を訪ねた

東北地方のかやぶき民家を撮り続けて、不思議な心地良い意匠を施した民家に出会った。これらの民家はどんな経緯で誰が造ったのか、暮らしている人に聞いてみたが、判然としなかったのだ。

仙台の山側にあった築三百年を越える民家には大黒柱が見当たらず、土間から台所に続く広い空間の隅に、複雑で巧妙な梁組があった。当家のお婆さんは「うちには嫁隠し柱が無い、大学の先生が調べても解らなかった」と話してくれたが、説明はそれだけであった。

岩手の南部、旧藤沢町にあった民家の棟には、「換気槽」という長さ三間(三・六メートル)もある格式と装飾性に優れた棟

仕舞いがあったのだ。かつて、養蚕が盛んに行われていた時代は、蚕の生育に室内湿度と湿度の管理は重要であったというが、それにしても、なぜこのような立派な造形になるのか、不思議でならなかった。

いろいろな所で、気仙大工の「匂い」とか「気配」だと言われ、その歴史、建築様式などを詳しく知りたくなった。伝承館のある気仙地域は平地が少なく、木材に関する仕事が大半を占めていたが、大工や左官の多くは出稼ぎ職人として各地に赴いた。民家や寺社を手掛けていて、歴史は江戸時代の初期まで遡れるという。意匠や造作に独自性を重んじたというが、遺構にその伝統工法が残っている。

民家建築は時代と共に大きく変わって、気仙大工が活躍した頃は施主と職人の繋がりは深く、施主の意向を形にするのが大工の技量であった。住宅メーカーが出現し、道具が機械化された昭和四十年代からは、合理化と分業化が行われ伝統工法で建てられる民家は少なくなり、気仙大工のような職人の領域は失われていった。

古民家に関心が集まるのは、それぞれ風土に適合した意匠や造作に個性があるからだ。地元の建築材が使われ、生業を配慮した民家は、地域の風景にも馴染んで存在感が高い。失った建築様式を残す古民家を、これからの時代に受け継いでいく必要性和意味を感じている。